大乘の卓越性

― *Nayatrayapradīpa* 梵文校訂と訳注（３）―

加納和雄・李学竹

はじめに

先稿（加納・李 2020、2021）に引き続き本稿では、声聞・大乘（顕教）・密教の優劣を論じるトリヴィクラマの著作『三理趣灯火』（*Nayatrayapradīpa*）の梵文校訂テクストと和訳を提示する。本稿で収録するのは梵文写本の fols. 8v6–11v4 に相当し、主に異教徒（部分的に声聞）に対する大乘の波羅蜜理趣の卓越性について論じる第 10 偈～第 15 偈およびそれに付随する散文箇所である。

内容概観

先稿までにみたように第 1 ～ 9 偈では大乘の不二智が声聞の四諦の智よりも勝れていることが明かされていた。大乘は波羅蜜理趣と真言理趣から成るが、本稿で扱う第 10 ～ 15 偈では、波羅蜜理趣が異教と声聞の教えよりも勝れていることについて論じられる。この一連の議論では異教徒が直接の標的となっており、声聞は付随的に論じられる。議論の前半（第 10 ～ 15 偈、8v6–10v6）では大乘の卓越性が 5 点にまとめられ、後半（11r1–v4）では異教徒に対する大乘の卓越性が扱われる。

議論は異教徒側からの論難から始まる。すなわち大乘の不二智はバラモン教の不二智となんら変わらないので、「大乘の膨大な典籍は無意味」（anarthako mahāyānagranthavistaraḥ）だとする論難である（8v6–9r2）。つまり両者は内容が重複しているので、大乘の典籍の存在は蛇足であり、バラモン教の聖典さえあれば十分に事足りるという。

これに対して大乘側の回答は、「汝らの如き自損する者たちにとって」（bhavadvidhānāṃ hatātmanāṃ）のみ大乘は「無意味」だと切り返す（9r2）。この「自損する者たち」とは、自分で自分をおとしめる人々を意味し、後述の説明（11v1–2）によると、自身の頑迷さのせいで救済の機会を自ら放棄している

異教徒のことを指す。後述箇所ではまた、声聞などに大乗を教えることには意味があるが、異教徒たちに大乗を教え示すことに意味はないともされる（11v2–4）。ようするに、大乗の典籍はその価値が分かる仏教徒にとっては有意義であって、価値を理解できない異教徒にとっては無意味だということである。

続けて大乗（波羅蜜理趣）は異教徒と声聞に対して次の 5 点で勝れているという。すなわち、①誓願（初発心）、②布施などの実践、③悲の深遠広大なること、④慈悲行が不断であること、⑤結果の獲得という 5 点である（第 10 偈）。これらの点は前から順に連鎖的に因果関係となっており最後にブッダの境地をもたらすという。そしてこれらは他のどこにも教えられていない、大乗特有の教えであるのだから、大乗の膨大な典籍は蛇足ではなく、意味があると述べる（9r2–4）。第 10 偈は少なくとも後代の 4 作品に引用が確認される（校訂テクストの注記参照）。

次にこの 5 点を第 11 ～ 15 偈はひとつずつ説明する。まず第 11 偈では、①衆生利益の誓願を立てること、すなわち最初に菩提心を起こすこと（初発心）が、諸仏の出現と同じ価値があると述べられる。それほどに発心が尊い理由は、ひとたび大悲の誓願を起こしたらならば、その慣性力によって悲心の勢いは決して弱まることなく、慈悲の実践が停滞することなく続くからである（第 8 ～ 9 偈、15 偈など参照）。それゆえに発心した菩薩たちは諸仏と同等な存在として神々などに供養されるという。これはいわゆる「誓願の菩提心」に相当する。

第 12 偈では、②布施行の理想的なモデルが、『学処集成』（*Śikṣāsamuccaya*）第 4 ～ 7 偈の所説に従って紹介される。すなわち菩薩たちの布施行は、自分の身体を衆生に差し出し、差し出した自分の身体を閑却せずに衆生の役に立つように適切に律し、持戒して浄らかに保ち、その結果として衆生利益を一層拡充するためによりすぐれた存在として生まれ変わることをめざすものであるという。同じ要領で菩薩は自分の財産と福徳も他者のために差し出すべきであるという。この②は「進趣の菩提心」に相当し、不屈の精進を指す。

第 13 偈では、③悲の深遠広大であることが、『大乗荘厳経論』第 17 章第 17 ～ 19 偈所説の大悲の三段階に準じて説かれる。三段階とはすなわち衆生所縁の悲、法所縁の悲、無所縁の悲である。つまり初発心時に一切衆生を悲の対象と定めて、次に布施行などを通じて悲を実践する際に施物や贈与対象者などへのこだわりから解放された三輪清浄の境地をめざし、それが完成するとその者の悲は所縁なき究極の状態へと至るという。このときに悲は③深遠広大なもの

となる。なお三段階のうち、衆生所縁の悲と法所縁の悲は、それぞれ①誓願と②実践とに対応すると理解できる。

第 14 偈では、上記の 3 項目つまり、①無辺の衆生の救済を約束する誓願（praṇidhāna）の菩提心と、②燃え上がる精進によって布施などを実践する不屈なる進趣（prasthāna）の菩提心と、③真実と一体化した悲の深遠広大性によって、菩薩は分別無き法界の境地に到達しているので、④彼の慈悲行は断絶なく連綿と持続すると述べられる。

第 15 偈では、上記の項目にもとづいて⑤一切智者たるブッダの境地という結果が得られるという。第 15 偈は Bhavyakīrti に引用される（校訂テクストの注記参照）。

以上の 5 点によって大乗の波羅蜜理趣は、声聞や異教よりも勝れているので、「大乗の膨大な典籍」には意義があるとまとめる（10v6）。これは冒頭に出された、大乗典籍は「無意味である」という論難（9r1–2）への直接の返答となっている。

続いて異教徒批判に特化した後半部に入る（11r1–v4）。まず異教徒の中でもヨーガ学派で最高の境地とされる「無種子三昧」（nirbījaḥ samādhiḥ）は、仏教においては何の価値もない「無想定」（asaṃjñisamāpatti）にほかならないと論じる。アビダルマの所説に従って無想定が悪趣をもたらすことなどと紹介し、挙句の果てには、「無種子三昧」には一切智者の境地に至るための「種」が「無い」三昧であるとまで揶揄する（11r1–4）。アビダルマにおいても「無想定」は価値のない三昧とされることから、この一節では、異教徒が声聞よりも劣っていると暗示されていることになる。

次にヴェーダーンタ派、シヴァ派、サーンクヤ派、ジャイナ教裸形派などの異教徒たちは自身の頑迷さのせいで救済の機会を自ら手放してしまっているため、ブッダによって哀愍されるべき人々（anukampanīya）であっても、怒りの矛先を向けるべき相手ではないという。いっぽうで仏教徒たちは正しい見解をもち、異教徒の悪説に翻弄されないので、異教徒よりも大乗が内容的に勝れていると論じられる（11r4–v1）。この一節は冒頭の回答中の「自損者」（hatātman, 9r2）という文言を釈説し、それが異教徒を指すとする。

ここで再び、先に見た「大乗の膨大な典籍は無意味」（anarthako mahāyānagranthavistaraḥ, 9r1）とする声聞側からの論難に立ち戻る。それらが「無意味」ではないことは既に 10 ～ 15 偈で論証されたので、ここではなぜ大乗の

典籍が膨大なのかについてその理由を明かす。すなわち、教化すべき人々の志が多種多様（vineyāśayabāhulya）であるから、それらに逐次対応するために大乗の典籍も多種多用で膨大であるという（11v1–2）。

最後にまとめとして、仏教徒のみが解脱の道を歩むが、異教徒はその道から遥か遠くに隔てられているという。仏教徒は、機根の違いに応じて遅速に差はあってたとしても必ず解脱に与ると述べたうえで、道の違いを越えて相互にそれぞれの聖典（āgama）を参照するならば更に「素晴らしい」（śobhante）という。ここには声聞も大乗を参照すべきことが暗示されている。しかし異教徒が大乗を観察することは、あたかも盲人がミルクの醸成の指標となる乳白色を観察することの如くに意味のないことであると辛辣に揶揄する（11v2–4）。この一節は冒頭の回答部「自損者にとって大乗典籍は意味がない」（9r2）という文言を再説するものである。つまり異教徒にとって大乗典籍は過ぎたるものとされる。

以上で異教徒と声聞に対する大乗の波羅蜜理趣の卓越性を扱う議論が終わる。次稿以降で扱う箇所ではいよいよ真言理趣（密教）の卓越性が論じられる。

科段

今回扱う箇所の科段をまとめて示すと下掲の通りである。略号 Skt. は梵文写本の所在を示し、Tib. は本書の蔵訳のデルゲ版（D3707）の所在を示す。全体は Skt. 8v6–11v4, Tib. 13v1–16r2 に相当する。

導入：大乗の不二智は婆羅門教の不二智とは異なる（Skt. 8v6–9r2, Tib. 13v1–3）
大乗が勝れている 5 つの点　（第 10 偈）　（Skt. 9r2–4, Tib. 13v3–5）
　1. 誓願　（第 11 偈）　（Skt. 9r4–v2, Tib. 13v5–14r2）
　2. 布施などの実践　（第 12 偈）　（Skt. 9v2–10r2, Tib. 14r2–v2）
　　自身の喜捨　（Skt. 9v3, Tib. 14r3–4）
　　喜捨した自身の保守　（Skt. 9v3–5, Tib. 14r4–6）
　　喜捨した自身の浄化　（Skt. 9v5–6, Tib. 14r6–7）
　　喜捨した自身の増大　（Skt. 9v6–10r1, Tib. 14r7）
　　自分の財産と福徳の喜捨・保守・増大（Skt. 10r1, Tib. 14r7–v1）
　　まとめ　（Skt. 10r1–2, Tib. 14v1）
　3. 悲の深遠広大性　（第 13 偈）　（Skt. 10r2–5, Tib. 14v2–5）
　　衆生所縁の悲　（Skt. 10r2–3, Tib. 14v2–3）

法所縁の悲　（Skt. 10r3–5, Tib. 14v3–4）
無所縁の悲　（Skt. 10r5, Tib. 14v4–5）
4. 慈悲行の不断　（第 14 偈）　（Skt. 10r5–v2, Tib. 14v5–15r1）
5. 結果　（第 15 偈）　（Skt. 10v2–6, Tib. 15r1–5）
まとめ：膨大な大乘仏典の有意義性　（Skt. 10v6, Tib. 15r5–6）
附論：ヨーガ学派の無種子三昧は無想定である　（Skt. 11r1–4, Tib. 15r6–v2）
自損する異教徒に対する大乘の卓越性　（Skt. 11r4–v1, Tib. 15v2–5）
大乘の典籍が膨大である理由：所化の多様性　（Skt. 11v1–2, Tib. 15v5–7）
異教徒批判のまとめ　（Skt. 11v2–4, Tib. 15v7–16r2）

梵文校訂および訳注について

本稿で提示する梵文校訂テクストと和訳は *Nayatrayapradīpa*, fols. 8v6–11v4 に相当する。校訂テクストは、中国蔵学研究中心に影印の紙焼きの形で保管される同書の梵文写本を底本としている。写本については前稿を参照されたい。

下掲の校勘記の中で異読や訂正（emendation = 以下 em.）は適宜注記するが、写本特有の綴り字や連声の標準化（ś/s の交替も含む）、アヴァグラハの追加、および分節の添削については煩を避けるため逐一報告しない。

和訳は、筆者の校訂した梵文の構文と内容の理解を示す目的で、便宜的に付したものである。和訳において、角括弧［ ］は訳文の補足を示し、丸括弧（ ）は追加説明を示す。

本稿で使用する記号と略号

太字　*Nayatrayapradīpa* 本偈
conj.　conjecture（暫定的な訂正）
em.　emendation（訂正）

梵文校訂テクスト

［導入：大乘の不二智は婆羅門教の不二智とは異なる］（Skt. 8v6–9r2, Tib. 13v1–3）[1]

【論難】nanu brahmadarśane ˈpy etad advaitaṃ pa$_{(9r1)}$ṭhyate | na ca brahmatattvaṃ

[1] Cf. *Tattvasārasaṃgraha*, D3711, 84b4–5.

saṃvittattvaṃ ceti nāmamātreṇa viśeṣa upapadyate, advayābhyupagamasya samānatvāt | tatas tīrthikadarśanenaivāsyārthasya[2] gatatvād anarthako mahāyānagranthavi$_{(9r2)}$-staraḥ[3] ||

【大乘】satyam anarthakaḥ | sa tu bhavadvidhānāṃ hatātmanām[4] iti viśeṣaṇīyaḥ | mahāyānasya tu yo viśeṣaḥ[5] śrāvakanayāt tīrthikanayād vā sa ucyate——

［大乘が勝れている 5 つの点：第 10 偈］（Skt. 9r2–4, Tib. 13v3–5）

praṇidhānāt[6] pravṛtteś ca gā$_{(9r3)}$ mbhīryaudāryayos tathā |
anivṛtteḥ phalāpteś ca mahāyānaṃ viśiṣyate ||（v. 10）[7]

ete hi praṇidhānādaya uttarottarahetubhāvenānuttaraṃ saugataṃ padam āvahantīti mahā$_{(9r4)}$ yānārthaḥ | na cāyam arthaḥ kvacid anyatra śrūyata iti kathaṃ vyartho mahāyānagranthavistaraḥ |

---

[2] -darśanenaivā-] em., -darśanaivā- Ms.

[3] この語については後出箇所（11v1–2）で詳論される。

[4] この語が異教徒を指す点は後出箇所（11r4–v1）を参照。なお hatātmanāṃ について蔵訳は bdag nyid dgra bcom pa rnams la となっている。

[5] viśeṣaḥ] em., viśeṣayaḥ Ms.

[6] praṇidhānāt] em., praṇidhāna- Ms.

[7] Quoted in Śraddhākaravarman's *Yogānuttaratantrāthāvatārasaṃgraha*（D3713, 105r5–6: de yang ji skad du **tshul gsum gyi sgron ma las** | smon pa dang ni 'jug pa dang || de bzhin zab dang rgya che nyid || mi ldog 'bras bu thob pas kyang || theg pa chen po khyad par 'phags || zhes gsungs pa dang |）, Atiśa's *Bodhimārgapradīpapañjikā*（D3948, 286v1–2: smon lam dang ni 'jug pa dang || de bzhin zab dang rgya che dang || mi ldog 'bras bu thob pas kyang || theg pa chen po khyad par 'phags || zhes **slob dpon tri bi ṭa ka ma la'i zhal snga nas tshul gsum pa'i sgron mar** gsungs te | nyan thos kyi theg pa bas pha rol tu phyin pa'i theg pa khyad par du 'phags so zhes khong du chud par bya'o ||）, Ratnākaraśānti's *Sūtrasamuccayabhāṣya*（D3935, 243r6: **lung las** | smon pa dang ni 'jug pa dang || de bzhin zab dang rgya che dang || mi ldog 'bras bu thob pas na || theg pa chen po khyad par 'phags ||）, Dharmendra's *Tattvasārasaṃgraha*（D3711, 83r7–v1: smon lam dang ni 'jug pa dang || de bzhin zab dang rgya che nyid || mi ldog 'bras bu thob pas kyang || theg pa chen po khyad par 'phags ||）.

［1. 誓願：第 11 偈］（Skt. 9r4–v2, Tib. 13v5–14r2）

tatra——

tādṛk praṇidhir[8] ādyaḥ sa tadgotrāṇām anuttaraḥ |
yat tadaivābhisaṃbuddhā[9] (9r5) iva pūjyāḥ surāsuraiḥ ||（v. 11）[10]

prathamacittotpāda eva teṣāṃ mahātmanām ananto 'nantarapravṛttiḥ[11] sakalasaugata-guṇabījabhūtas tathāvidho yat saṃbodhiprāptā iva sarvāmararājādi (9r6) bhiḥ pūjyante, sugataiś cāvalokyante, bodhisattvaiś cābhinandyante, kiṃ bahunānuttaro-pāyapratiṣṭhitatvena buddhotpāda eva bodhicittotpādo jagadāśvāsahetur iti | ya (9v1) thā mañjuśrīpraṇidhiḥ——

yāvatī prathamā koṭiḥ saṃsārasyāntavarjitā[12] |
tāvat sattvahitārthāya cariṣyāmy amitāṃ carīm ||[13]

ratnolkābhaṭṭārikāyāḥ[14] prathamacittotpādikabodhisattva (9v2) vyavasthāne[15] sphuṭam etat, *bhadracaryā*diṣu ca | eṣa tāvan mahāyāne mahātmanāṃ praṇidhiviśeṣaḥ ||

---

[8] praṇidhir] em., praṇidhān Ms.

[9] tadaivābhisaṃbuddhā] em., tadaivābhisaṃbuddhaḥ Ms.

[10] Cf. e.g. *Bodhicaryāvatāra* 1.9.

[11] 'nantarapravṛttiḥ] conj., 'nantapravṛttiḥ Ms. Cf. bar chad med par 'jug.

[12] -varjitā] conj., -varjitāḥ Ms.（or read: saṃsārasyānta [= -ānto] varjitaḥ?）

[13] *Mañjuśrībuddhakṣetraguṇavyūhālaṅkārasūtra*, D59, Ga 279r7: 'khor ba tha ma med pa yi || sngon gyi tha ma ji srid pa || de srid sems can phan don du || spyod pa dpag yas spyad par bya ||. 實叉難陀訳, T11, 345a1–346a2: 爲一一衆生 誓盡未來際 受無量生死 而作大饒益. 不空訳, T11, 913a10–11: 乃至本初際 及盡生死邊 利益諸有情 我行無邊行. *Śikṣāsamuccaya*（ed. Bendall）p. 13.15–19: yathāryamañjuśrībuddhakṣetraguṇavyūhālaṅkārasūtre bhagavatā mañjuśriyā pūrvajanmāvadāne caryopetaṃ bodhicittam utpāditaṃ tathotpādayitavyam | evaṃ hi tenoktam || yāvatī prathamā koṭiḥ saṃsārasyāntavarjitā | tāvat sattvahitārthāya cariṣyāmy amitāṃ carim ||. See, e.g., Yamamoto 2005 and Nakamikado 2014: 67.

[14] -bhaṭṭārikāyāḥ. Cf. Tib. *ratnolkābhaṭṭārikāyāṃ（rje btsun rin chen sgron ma las）.

[15] -bodhisattvavyavasthāne. Cf. Tib. *-avasthāne（gnas skabs su）.

［2. 布施などの実践：第 12 偈］（Skt. 9v2–10r2, Tib. 14r2–v2）

ātmabhogatrikālīnaśubhānāṃ vidadhaty[16] amī |
pratyekam eṣām utsargarakṣāśuddhivardhanā$_{(9v3)}$ ni[17] ca ||[18]（v. 12）

（自身の喜捨）（Skt. 9v3, Tib. 14r3–4）

pravṛttir api bodhisattvānām eṣā yat sarvasattvebhya ātmabhāvaṃ prayacchanti |

（喜捨した自身の保守）（Skt. 9v3–5, Tib. 14r4–6）

dattam api rakṣanti | kathaṃ dattasya rakṣaṇam iti cet, ucyate——sakalasattvaparibhogārtha$_{(9v4)}$m evātmabhāvadānam | sa ca yadā kathaṃcid utsṛjyate, na sarvasattvopabhogyaḥ syād iti | dāsa iva svāmyupabhoganimittam ātmabhāvarakṣāṃ kurvantīti na doṣaḥ | tad ā$_{(9v5)}$ha——

paribhogāya[19] sattvānām ātmabhāvādi dīyate |
arakṣite kuto bhogaḥ kiṃ dattaṃ yan na bhujyate ||

（*Śikṣāsamuccaya* v. 5）

（喜捨した自身の浄化）（Skt. 9v5–6, Tib. 14r6–7）

tathā rakṣitasyāpi śuddhiḥ kāryā svāmyartham[20] eva | śīlādiviśuddhena hy ātmabhāve$_{(9v6)}$na sakalasattvasvāminām arthaḥ[21] saṃpatsyata iti śodhanam upapannam |

（喜捨した自身の増大）（Skt. 9v6–10r1, Tib. 14r7）

śuddhasyāpi svāmyartham eva vardhanaṃ kāryam | bhṛtyasya hi cakravartitvādyu-

---

[16] vidadhaty] em., vidadhīty Ms.

[17] -rakṣā-] em., -rakṣyā- Ms.;
-vardhanāni] conj.（*hyper metric*）, -dhanāni Ms.

[18] Cf. *Śikṣāsamuccaya*（ed. Bendall）p. 17.13–14（v. 4）, p. 18.8–9; *Bodhicaryāvatāra* 3.10.

[19] paribhogāya] em., paribhogīya Ms.

[20] svāmyartham] em., svāmyārtham Ms.

[21] arthaḥ] em., artha Ms.

tpattyā[22] sattvasvāmināṃ aihikāmutrikārthasi (10r1) ddhir iti tad apy upapadyata[23] eva |

（自分の財産と福徳の喜捨・保守・増大）（Skt. 10r1, Tib. 14r7–v1）

evaṃ bhogatryadhvagatakuśalamūlayor apy utsargarakṣāśuddhivṛddhayo[24] veditavyāḥ |

（まとめ）（Skt. 10r1–2, Tib. 14v1）

ayaṃ cārthaḥ *śikṣāsamuccaye* sphuṭīkṛta iti nehātivistāryate | (10r2) pravṛttir apy aśeṣopāyakauśalāliṅgitā ||

［3. 悲の深遠広大性：第 13 偈］（Skt. 10r2–5, Tib. 14v2–5）

yā kṛpā sattvaviṣayā pravṛttau dharmatāsthitā |
sānālambanatāṃ prāptā gambhīrodāratāṃ vrajet || (v. 13)

（衆生所縁の悲）（Skt. 10r2–3, Tib. 14v2–3）

bodhisattvasya hi pariṇatacaturbrāhmavihā (10r3) rasya triduḥkhatāghrātaṃ sattvadhātum avalambya balavatī samastālambanā[25] mahākaruṇotpadyate |

（法所縁の悲）（Skt. 10r3–5, Tib. 14v3–4）

tasya mahākṛpāyāḥ[26] sattvālambanāyā dānādau pravartamānasya na[27] tāvad dānādiḥ (10r4) paripūrṇo[28] bhavati yāvan na prajñāpāramitāyāṃ sthito bhavati[29] | tadavasthānaṃ

---

[22] cakravarttitvādyutpattyā] em., cakravarttitvādutpattyā Ms. Cf. Tib. bran yang 'khor los sgyur ba la sogs par skyes par gyur pas.

[23] upapadyata] em., upapādyata Ms.

[24] -śuddhivṛddhayo] conj.（≈ Tib.）, -vṛddhiśuddhayo Ms.

[25] -ālambanā] em., -ālambaṇā Ms.

[26] mahākṛpāyāḥ] conj., mahākṛpā Ms.

[27] na] em. ca Ms.

[28] dānādiḥ paripūrṇo seems an illegular form（instead of dānādi paripūrṇaṃ）.

[29] dānādiḥ … sthito bhavati seems an illegular form（instead of dānādi … sthitaṃ bhavati）.

mahādeyādipariśuddhidvāreṇa | tatpariśuddhiḥ punar anupalambhayogena[30] | sā tasya dharmālambanā (10r5) karuṇā syāt |

（無所縁の悲）（Skt. 10r5, Tib. 14v4–5）

evaṃ tribhiḥ kalpāsaṃkhyeyair dharmālambanakṛpābhyāsapariṇatau nirālambanā karuṇotpadyate | iyaṃ sā gambhīrodārateti gāmbhīryaudāryaviśeṣaḥ ||

［4. 慈悲行の不断：第 14 偈］（Skt. 10r5–v2, Tib. 14v5–15r1）

ana(10r6)ntottaptatattvaikarasais te dharmadhātutām |
praṇidhānādibhiḥ prāptā nivartante punaḥ katham ||（v. 14）

anantasattvadhātūddharaṇāśayatayānantena praṇidhānenottaptavīryeṇa ca prasthānena yathā (10v1) sarvārthasiddhakumārasya samudrocchoṣaṇaṃ prati sarvaṃ te gāmbhīryaudāryānugatam evācaranti | ta ete prajñāpāramitādhiṣṭhitānantottaptapraṇidhiprasthānādinā nirvikalpadhātutvam adhigaccha(10v2)nti | adhigatānantasampadanantabalavadaviparītahetusāmarthyān[31] na nivṛttibhājaḥ | ity anivṛttihetuviśeṣaḥ ||

［5. 結果：第 15 偈］（Skt. 10v2–6, Tib. 15r1–5）

ānandam avyayaṃ jyotir viśvarūpam akalpanam |
mahākṛpā(10v3)rasāviddhaṃ[32] dharmadhātvātmakaṃ phalam ||（v. 15）[33]

---

[30] anupalambha-] conj., upalambha- Ms. Cf. Tib. mi dmigs pa'i.

[31] -sampadanantabalavad-] em., -sampado 'nantabalavadanantabalavad- Ms. Cf. Tib.: phun sum tshogs pa mtha' yas pa thob pa dang stobs mtha' yas pa dang ldan pa'i phyin ci ma log pa'i rgyu'i stobs kyis na.

[32] mahākṛpārasāviddhaṃ] em., mahārasakṛpā (10v3) viddhaṃ Ms. この訂正は内容および後述の注釈文の文言 mahakaruṇā および anantabodhirasāviddhaṃ そして蔵訳に支持される。

[33] Quoted by Bhavyakīrti, *Pradīpoddyotanaṭīkā*, D1793, Ki 62v5: ji skad du | dga' ba mi zad 'od gsal zhing || sna tshogs gzugs can mi rtog pa || snying rje chen po'i ros khyab pa || chos dbyings bdag nyid 'bras bu yin || zhes gsungs so ||

yat tat paramānandasvabhāvaṃ jyotir avyayaṃ viśvarūpātmakaṃ nirvikalpakaṃ[34] dharmadhātusvarūpakaṃ tat phalam akhilasya praṇidhānādeḥ | tac ca mahākaruṇāve (10v4) dhavaśād anavaratānābhogavāhisakalaparakṛtyānuṣṭhānātmakam anantabodhirasāviddham ivākṣayaṃ kanakanidhānam | na caitat padaṃ sārvajñaṃ sarvātmakaṃ sarvopakāri nirvi (10v5) kalpakaṃ[35] dharmadhātusvabhāvaṃ yathoktahetum antareṇopapadyate | aviparītopāyasatkṣetrapratiṣṭhānaṃ tu paropakāraprapaṇidhibījād anurūpaprasthānasaṃskārāc cānivṛttidharmakaṃ[36] jaga (10v6) dupakārāspadaṃ padaṃ saugatam upapadyata eva | kāraṇānurūpatvāt kāryasya |

［まとめ：膨大な大乗仏典の有意義性］（Skt. 10v6, Tib. 15r5–6）

tasmād anuttarapadaprāptihetūnāṃ praṇidhānādīnāṃ mahāyāna evopadeśāt kathaṃ vyartho mahāyānagranthavistaraḥ | (11r1)

［附論：ヨーガ学派の無種子三昧は無想定である］（Skt. 11r1–4, Tib. 15r6–v2）

yat punar asaṃprajñāto[37] yogo nirbījaḥ[38] samādhir ity[39] evamādibhir vyapadeśais tīrthikā vyapadiśanti tad asaṃjñisamāpatter[40] eva tathākhyānam[41] | tasyā eva sakalacetovṛttisaṃjñoparama (11r2) mātrasvabhāvatvāt | sā ca caturthadhyānabhūmikā, caturtha eva ca dhyāne bṛhatphalaikadeśāsaṃjñisattveṣv āsaṃjñikaṃ tasyā

---

[34] nirvikalpakaṃ] conj., nirvikalpaṃ Ms.

[35] -kalpakaṃ] em., -kalpaka Ms.

[36] cānivṛtti-] em., ca nivṛtti- Ms. Cf. Tib. mi ldog pa'i chos can.

[37] punar asaṃprajñāto] conj., punaḥ saṃprajñāto Ms. Cf. Tib. 'du shes med pa'i sbyor ba (*asaṃprajñāto yogo). ここでは『ヨーガ・スートラ』の無種子三昧（nirbījaḥ samādhiḥ）が無想定と同じであると論じられているので、文冒頭の saṃprajñāto yogo を、無種子三昧の類義語である asaṃprajñāto yogo に訂正して読んだ。この理解は蔵訳（'du shes med pa'i sbyor ba, * asaṃprajñāto yogo）にも支持される。Cf. *Yogabhāṣya* ad 1.2: sa nirbījaḥ samādhiḥ. na tatra kiṃcit saṃprajñāyata ity asaṃprajñātaḥ.

[38] nirbījaḥ] em., nibījaḥ Ms.

[39] *Yogabhāsya* ad 1.2, *Yogasūtra* 1.51: tasyāpi nirodhe sarvanirodhān nirbījaḥ samādhiḥ.

[40] asaṃjñi-] em., asaṃjña- Ms.

[41] *tathākhyānam*] read: *tathākhyā*ta*m*?

vipākaḥ |[42] tām eva ca pare mūḍhā anāsāditakalyāṇamitrā nirvāṇasaṃjñinaḥ (11r3) samāpadyante | tadā[43] yathāparaparyāyavedanīyakarmābhimukhyaṃ[44] punar api narakapretatiryagupapattayo vistāryante | yā ceyam asyā[45] nirbījaḥ samādhir iti[46] saṃjñā sopapadyata[47] e(11r4)va, sarvajñapadaprāptibījarahitatvāt | tad alam atra bālavilasitaphalavikalpanena |

［自損する異教徒に対する大乘の卓越性］（Skt. 11r4–v1, Tib. 15v2–4）[48]

te hi mandā vedāntaśaivasāṃkhyakṣapaṇakādimativipralabdhabuddhayo 'viditaparamārthā dṛḍhaṃ ci(11r5)ttaṃ prapiṇḍyaikāntadṛṣṭyabhiniviṣṭāḥ, aprāptavinayakālatayā ca mahākāruṇikair apy upekṣitā bhūyaḥ saṃsāragranthim eva draḍhayanto 'nukampanīyā eva karuṇāśālinā vipadi (11r6) vartamānā iti na dveṣārhāḥ |

ye tu saugatanetrikās te 'viparyastadhiyaḥ sāṃsārikanairvāṇikapakṣāvabodhapaṭavo[49] na durākhyātasiddhāntānugabuddhibhiḥ pratāryanta ity eṣa brahmādida(11v1)-rśanebhyo mahāyānasyārthaviśeṣaḥ |

［大乘の典籍が膨大である理由：所化の多様性］（Skt. 11v1–2, Tib. 15v5–7）[50]

bahutvaṃ tu vineyāśayabāhulyāt | sarva eva hi kleśabandhanā bhagavatāṃ kṛpābhūmiḥ | te cānantacittacaritā ity anantopāyanayavineyatvā(11v2)d[51] anantā vicitrā ca buddhānāṃ dharmadeśanā yuktaiva |

---

[42] Cf. AK 2.41bcd.

[43] tadā] em., “ta” is not visible in the Ms.（in the place of *ta*, there is one blank space in the Ms.）

[44] Cf. Tib: lan grangs gzhan la myong bar 'gyur ba'i las mngon du phyogs par gyur pa gang yin pa des ni, *ye cāparaparyāyavedanīyakarmābhimukhās te.

[45] asyā] em., asya Ms.

[46] iti] em., ati Ms.

[47] sopapadyata] em., saupapadyata Ms.

[48] この一節は既出箇所（9v2: satyaṃ ... viśeṣanīyaḥ）への注釈となっている。

[49] sāṃsārika-] em., saṃsārika- Ms.

[50] この一節は既出箇所（9v1–2, 10v6: mahāyānagranthavistaraḥ）への注釈となっている。また *Tattvasārasaṃgraha*（D3711, 84b1–4）に一部借用される。

[51] -naya-] em., -na- Ms.

［異教徒批判のまとめ］（Skt. 11v2–4, Tib. 15v7–16r2）[52]
tasmāt saugatā eva mokṣamārgādṛtotsāhāḥ[53] | indriyabhedāc ca kṣipraciraciratarav-imuktibhāginaḥ[54] parasparam ā$_{(11v3)}$gamārthaṃ vicārayantaḥ śobhante | kim anyeṣāṃ tanutaradhiyāṃ kudṛṣṭidagdhasantānānām atidūraṃ-kṣemamārgaparibhraṣṭānāṃ jātyandhānām iva dhavalādikṣīraguṇaparī$_{(11v4)}$kṣayā mahāyānaparīkṣayeti |

和訳

［導入:大乗の不二智は婆羅門教の不二智とは異なる］（Skt. 8v6–9r2, Tib. 13v1–3）[55]
【論難】［異教である］ブラフマンの思想（brahmadarśana、つまりバラモン教）においても、その［大乗の］不二（advaita）［智］は述べられている。そして［両者の違いは］「ブラフマンの真実」と［大乗の］「心の真実」という単なる名称上の違いだけではありえない（na upapadyate）。なぜならば不二ということを承認する点で［その異教と大乗は内実が］同じだからである。それゆえに異教徒（tīrthika）の思想だけでもこの［大乗の］内容は理解されるので、大乗の膨大な典籍は意味がない（余計である）[56]。
【大乗】確かにその通りであって、〝意味がない〟。但しそれは、汝らの如き自損する者（hatātman）たちにとっては［意味がない］と限定されなければならない[57]。一方で大乗には、声聞の理趣あるいは異教徒の理趣に対する卓越性

[52] この一節は既出箇所（9v2: satyaṃ … viśeṣaṇīyaḥ）への注釈となっている。またこの一節は *Tattvasārasaṃgraha*（D3711, 84b5–7）にほぼそのまま借用される。

[53] -ādṛtotsāhāḥ] em., ādṛtotsāḥ Ms.

[54] kṣipra-] em., kṣīpra- Ms.

[55] Cf. *Tattvasārasaṃgraha*, D3711, 84b4–5.

[56] 大乗の典籍が膨大である理由は所化の多様な志に対応するためだと後述される（11v1–2）。

[57]「自損する者」とは、自身の頑迷さのせいで救済の機会を自ら手放す異教徒のことを指すことが後述の説明から知られる（11v1–2）。また自損者なる異教徒に大乗を教えても無意味であるが、声聞には大乗を教える価値があることも後述の説明から知られる（11v2–4）。つまりここでは大乗の典籍はその価値が分かる仏教徒にとっては有意義であって、価値を理解しない異教徒には無意味（過ぎたるもの）だといわれている。

（viśeṣa）[58] があり、それが［以下に］語られる――[59]

［大乗が勝れている 5 つの点：第 10 偈］（Skt. 9r2–4, Tib. 13v3–5）[60]

（1）誓願の点で、（2）［布施などの］実践の点で[61]、（3）［悲の］深遠さと広大さの点で、また、（4）［慈悲行の］不断という点で、そして（5）結果の獲得という点で、大乗は勝れている[62]。（第 10 偈）

じつに誓願を始めとするこれら（5 点）は、［順々に］後々の原因となって[63]、［やがては］無上の善逝の境地をもたらす、というのが大乗の内容（artha）であ

[58] 大乗と異教との相違については後出の［自損する異教徒に対する大乗の卓越性］（11r4–v1）の一節にも付記される。

[59] これらの声聞の論難と大乗の回答箇所は蔵訳と複数の点で齟齬する（D13b1–3: dris pa | tshangs pa'i lta ba la yang gnyis su med pa 'di 'chad la | tshangs pa'i de kho na nyid dang | yang dag par rig pa'i de kho na nyid ces bya bar ming tsam gyis khyad par du phye ba ni rigs pa yin te | gnyis su med par khas 'ches par mnyam pa'i phyir ro || de bas na mu stegs pa'i lta ba nyid dang 'di'i don rtogs pa gcig pa nyid yin pa'i phyir theg pa chen po'i gzhung rgyas pa ni don med pa ma yin no || de ni khyed lta bu'i bdag nyid dgra bcom pa rnams la khyad par med pas don med pa ni bden mod kyi nyan thos kyi theg pa'am | mu stegs kyi tshul las theg pa chen po'i khyad par gang yin pa de brjod par bya'o ||）。

[60] 例えば『大乗荘厳経論』19.59–60 には、①所縁、②修行、③智、④精進への着手、⑤方便に巧みなこと（方便善巧）、⑥現証、⑦仏業について、大乗のもつ 7 点の偉大性（mahattva）が語られるが、本書の 5 点とは異なる。

[61] 拙訳では pravṛtti を「実践」としたが、身口意の行為に着手することと理解するならば「着手」「発動」などの訳も可能である。

[62] この偈を引用するものには例えば下記のものがある。Śraddhākaravarman, *Yogānuttaratantrārthāvatārasaṃgraha*（D3713, 105r5–6）, Atiśa, *Bodhimārgapradīpapañjikā*（D3948, 286v1–2）, Ratnākaraśānti, *Sūtrasamuccayabhāṣya*（D3935, 243r6）, Dharmendra, *Tattvasārasaṃgraha*（D3711, 83r7–v1）.

[63] つまり、誓願は実践の因、実践は深遠さと広大さの因、という具合に因果関係が連鎖することを指す。

る[64]。そしてこの内容は、他のどこにも（つまり声聞の教えにも異教徒の教えにも）聞かれることはない。だから、どうして大乗の膨大な典籍（mahāyānagranthavistara）が無意味となるだろうか。

［1. 誓願：第 11 偈］（Skt. 9r4–v2, Tib. 13v5–14r2）
その中で――

それ（大乗）の種姓を持つ者（菩薩）たちの、かの最初の誓願は、無上であり、次のようなものである。すなわち[65]、まさにその時（初発心時）に［発心した菩薩たちは］、あたかも正等覚者のごとくに、神々や阿修羅たちによって供養される。（第 11 偈）[66]

彼ら偉大な者（菩薩）たちの初発心（= 誓願）こそは[67]、終わりがなく［持続し］、

---

[64] artha は「目標」とも訳しうるが、ここでは大乗の膨大な典籍が異教徒のテクストと内容が重複するので無意味だという直前の論難を踏まえているため、「内容」と訳した。

[65]「すなわち」は tādṛk ... yat の訳。下掲の注を参照。

[66] 拙訳では tādṛk が yat に呼応していると理解して訳した。注釈では tādṛk が tathāvidhaḥ と換言され、それが yat と呼応しているからである。tādṛk と anuttaraḥ については、別訳として「かくも無上である」とも訳しうる。一方、仮に sa と yat が呼応していると理解した場合は次のような訳となるが注釈とは齟齬することになる。「そのような（大乗を特有なものとする誓願）、その種姓を持つ者たちの、最初のその（sa）誓願は、無上である。すなわち、まさにその時、あたかも正等覚者のごとくに、神々や阿修羅たちによって供養されるところの［誓願は］」。なおこの偈の蔵訳は齟齬する箇所がいくつかある（dang po de'i rigs dang ldan pa rnams ni | smon lam bla na med pa de lta bu gang yin pa de nyid kyis mngon par rdzogs par sangs rgyas pa ltar lha dang lha ma yin rnams kyis mchod pa dang）。
第 11 偈の所説と同様の表現は例えば下記にもみられる。『入菩提行論』1.9: bhavacārakabandhano varākaḥ sugatānāṃ suta ucyate kṣaṇena | sanarāmaralokavandanīyo bhavati smodita eva bodhicitte ‖（訳「輪廻生存という牢獄の束縛をもつ惨めな者でも、菩提心が生起したときには、その瞬間に、善逝たちの息子（菩薩）と呼ばれ、人や天を含む世界の者たちに礼拝されるべき存在となった」。）

[67] prathamacittotpāda eva は主格として理解した。注釈対象である偈の語句 praṇidhiḥ が主格であり、この注釈文の一連の形容詞は主格だからである。蔵訳は処格として訳すが拙訳で

活動に中断がなく、善逝の全徳性の種子であり、次のようなものである。つまり（tathāvidho yat）［彼ら初発心した菩薩たちは］既にさとりに達した方たちさながらに、一切の神々（amara）の王などによって供養され、善逝たちによって見据えられ（avalokyante）[68]、菩薩たちによって讃えられる。［発心した菩薩は］無上の方便（仏に確実になるための手段）にしっかりと立っているので[69]、発菩提心は諸仏の出現にほかならず、世界に安心（āśvāsa）をもたらす原因である、ということは多言を要さない（kiṃ bahunā）[70]。［次のような］文殊の誓願の如し――

> 輪廻に発端（prathamā koṭi）があり、［その発端に］終わりがない限り（antavarjitā）、その限り、私は衆生利益のために果てのない行を為しましょう[71]。

ラトノールカー女尊の、初発心菩薩についての規定の中でこのことは明瞭で

は従わない（dang po sems bskyed pa nyid na）。

[68] 蔵訳は「見守られ」（spyan ras kyis 'tsho ba）とある。

[69] つまり、発心した菩薩は確実にブッダになる、という意味で理解した。蔵訳は「無上を得る方便に依拠することによって」（bla na med pa thob pa'i thabs la rab tu gnas pa nyid kyis）とある。

[70] 別訳として「無上の方便が立脚しているので、発菩提心は諸仏の生起にほかならず、世界に安心 / 鼓舞をもたらす原因ということは、多言を要さない」ともしうる。

[71] 前半句は暫定訳であり、「無始無終の輪廻」という仏教の通念と一致しない。別訳として「輪廻の発端が終局を失うまで（つまり輪廻が尽きるまで）」とも訳しうるか。この偈は、文殊菩薩が過去世でアンバララージャだったときに発した一連の発菩提心の偈の冒頭である。*Mañjuśrībuddhakṣetraguṇavyūhālaṅkārasūtra*, D59, Ga 279r7（本書のリンチェンサンポ訳は同経の蔵訳をそのまま用いている）、實叉難陀訳 T11, 345a1–346a2、不空訳 T11, 913a10–11、*Śikṣāsamuccaya*（ed. Bendall）p. 13.18–19. 山本 2005: 38「輪廻の最初の返際が最後の［辺際］を欠く間は私は衆生利益のために無量の行を行じよう」。中御門 2014: 67「輪廻の終わりは無いが、始まりの終わりがあるかぎり、そのかぎり衆生を益するために、無量の行を行いましょう」。なおこの偈を始めとする一連の発菩提心偈は、例えばカマラシーラの『修習次第初篇』、アティシャの『菩提道灯論』、ジターリの『菩提過犯懺悔注菩薩学次第』に言及ないし引用されることが報告される（山本 2005）。

ある[72]。そして『普賢行』などにおいても［明瞭に説かれる］。まずは、以上が大乗における偉大な者たちの卓越した誓願である。

［2. 布施などの実践：第 12 偈］（Skt. 9v2–10r2, Tib. 14r2–v2）

そしてこの者（菩薩）たちは、自身（身体）･財産（享受）･三世の善（福徳）とについてそれぞれ、彼ら（衆生たち）への[73]喜捨・保守・浄化・増大とを成し遂げる（vidadhati）[74]。（第 12 偈）

（自身の喜捨）（Skt. 9v3, Tib. 14r3–4）
また、菩薩たちの「実践」（pravṛtti）とは、一切衆生に［自身の］身体（ātmabhāva）を差し出すことである。

（喜捨した自身の保守）（Skt. 9v3–5, Tib. 14r4–6）
さらに［菩薩は］差し出した［自身の身体］を［大切に］保守する[75]。なぜ差

---

[72] 典拠未詳。蔵訳は「ラトノールカー女尊において」（rje btsun rin chen sgron ma las kyang）と訳す。この場合、「ラトノールカー女尊」は陀羅尼などのテクストを意図している可能性もある。

[73] eṣām は、衆生たちを指すと理解したが、amī と同じく菩薩たちを指すと理解することも可能であり、「彼らの自身（身体）･財産」云々と繋がる。この eṣāṃ は蔵訳で sems can kun la とある。eṣāṃ は直後の注で sarvasattvebhyaḥ と言い換えられているとも理解できる。

[74] 菩薩が自分の身体を衆生のために喜捨・守護・浄化・増大させ、そして自分の財産および福徳についても同じく喜捨・守護・浄化・増大させることがここに説かれていると理解できる。この理解の根拠は後出の注釈（fol. 10r1: evaṃ bhogatryadhvagatakuśalamūlayor apy utsargarakṣāśuddhivṛddhayo veditavyāḥ）および典拠とされている『学処集成』などを参照。*Śikṣāsamuccaya*（ed. Bendall）p. 17.13–14（verse 4）: ātmabhāvasya bhogānāṃ tryadhvavṛtteḥ śubhasya ca | utsargaḥ sarvasattvebhyas tadrakṣāśuddhivardhanam ||; p. 18.8–9: tasmād evam ātmabhāvabhogapuṇyānām aviratam | utsargarakṣāśuddhivṛddhayo yathāyogaṃ bhāvanīyāḥ ||; *Bodhicaryāvatāra* 3.10: ātmabhāvāṃs tathā bhogān sarvatrādhvagataṃ śubham | nirapekṣas tyajāmy eṣa sarvasattvārthasiddhaye ||.

[75] ここでの「保守」（rakṣā）は、ないがしろにせずに大切に扱うことを意味する。Cf. *Śikṣāsamuccaya*: evam eṣām ātmabhāvādīnām utsṛṣṭānām api rakṣā kāryā.（訳「そのように差

し出した［身体］を保守するのかというなら、次のように言われる――「全衆生に享受してもらうためにこそ、［菩薩は自身の］身体を差し出す。しかし（ca）彼が［自身の身体を］完全に打ち棄ててしまう場合、［その身体は人のために役立てなくなり］一切衆生に享受してもらえなくなるだろう」と[76]。［菩薩たちは］ちょうど召使いのごとく、［身請け人たる］主人に享受してもらうために、［差し出した］自分自身の身体を［傷つけないように］保守するので（つまり利己的に保身するわけではないのだから）過失はない。それゆえ（tad）[77]言う――

> 衆生たちに享受してもらうために、［菩薩の］身体などが差し出される。［差し出されたその身体が自身で適切に］保守されない場合、［衆生たちはその身体を］どうして享受するだろうか。［打ち棄てられて役に立たなくなった身体を衆生は享受しないだろう。そしてそのような］享受されないような喜捨に一体どんな意味があるのか。（*Śikṣāsamuccaya* v. 5）[78]

（喜捨した自身の浄化）（Skt. 9v5–6, Tib. 14r6–7）
同様に、まさに［身請け人である］主人（衆生）のために、保守された［菩薩の身体］には、さらに浄化がなされるべきである。というのは（hi）、戒などで浄化された身体によって［菩薩は衆生たちに奉仕して］、全衆生という主人たちへの利益が完成することになるからである。だから、浄化することがふさわしいのである[79]。

（喜捨した自身の増大）（Skt. 9v6–10r1, Tib. 14r7）
まさに主人のために、浄化された［菩薩の身体］にはさらに、増大（勝れたも

し出した［自分の］身体などを、［菩薩は］保守しなければならない」。）

[76] この一文を特定のテクストからの引用とは判断しなかったが、最終的な結論は保留する。

[77] tat は「そのことについて」とも訳しうる。

[78] 蔵訳では、この『学処集成』第 5 偈の次に続く第 6 偈前半句「それゆえ衆生に享受してもらうために、［菩薩は自分の］身体などを守るべきである」（tasmāt sattvopabhogārtham ātmabhāvādi pālayet）も追加で引用されている。『学処集成』第 4 ～ 7 偈全体が本議論に関連している。本稿末【資料】参照。

[79] 蔵訳には śodhanam に該当する訳語がない。

のにすること）がなされるべきである。というのは、［菩薩という］〝臣下〟は転輪王などに生まれ変わることによって［衆生たちへの奉仕をより充実させて］、衆生たちという〝主人〟たちの、この世とあの世の利益（aihika-āmutrika-artha）を完成するからである。だから、そのこと（増大、つまり喜捨した身体をより勝れたものとすること）も必ず妥当する。

（自分の財産と福徳の喜捨・保守・増大）（Skt. 10r1, Tib. 14r7–v1）
［菩薩の身体の喜捨などと］同様に、［菩薩の］財産（bhoga）および三世にわたる善根との両者にも、喜捨・保守・浄化・増大があると知るべきである。

（まとめ）（Skt. 10r1–2, Tib. 14v1）
そしてこの内容は、『学処集成』（*Śikṣāsamuccaya*）において明瞭にされた。だから本書では敷衍しない。実践（pravṛtti）はまた、余す事なく方便善巧に抱擁されている（つまり実践は方便善巧、つまり次に述べる悲の深遠大性と一組である）[80]。

［3. 悲の深遠広大性：第 13 偈］（Skt. 10r2–5, Tib. 14v2–5）

悲は、①衆生を対象とし（衆生所縁）、②［布施などの］実践（pravṛtti）に際して法性（般若波羅蜜）に立脚し（法所縁）、③無所縁の状態になると、深遠・広大なる状態へと至る[81]。（第 13 偈）

（①衆生所縁の悲）（Skt. 10r2–3, Tib. 14v2–3）
じつに四梵住を円熟させた菩薩には、三苦性に苛まれている衆生界を対象にし

[80] なお pravṛttir apy aśeṣopāyakauśalāliṅgitā に対応する箇所の蔵訳は 'jug pa yang thabs la mkhas pa 'di dang rjes su 'brel ba yin no とあり多少異なる。

[81]『大乗荘厳経論』17.17–19 では四梵住に衆生所縁、法所縁、無所縁のものがあると説かれ、ここではそれに基づいて、悲に衆生所縁、法所縁、無所縁があると説かれている。さらに衆生所縁の悲は「誓願」（praṇidhāna）、法所縁の悲は「布施などの実践」（pravṛtti）、無所縁の悲は「奥深さと広大さ」（gāmbhīryaudārya）に各々対応していると理解できる。

て、〝全て［の衆生］を所縁とする[82]強力な大悲〟が生じる[83]。

（②法所縁の悲）（Skt. 10r3–5, Tib. 14v3–4）
衆生を所縁とする大悲にもとづいて、布施などに向けて実践している彼にとって、［その実践が］般若波羅蜜に立脚しない限り、［彼の］布施［行］などは円満されない。その状態（布施などが円満された状態）は、大いなる施物[84]などという浄化を通じて［達成される］。さらにまた、それ（布施など）の浄化は、無知覚の実践を通じて［達成される］[85]。［以上に基づいて］彼には、かの、〝法を所縁とした慈悲〟があるだろう[86]。

（③無所縁の悲）（Skt. 10r5, Tib. 14v4–5）
そうして、三阿僧祇劫を通じて、法を所縁とした慈悲の反復実践（習熟）が完成するときには、〝所縁なき悲〟が生じる[87]。これが（iyaṃ sā）、深遠広大性である。以上（iti）、深遠広大性という［大乗の］すぐれた点である。

［4. 慈悲行の不断：第 14 偈］（Skt. 10r5–v2, Tib. 14v5–15r1）

彼ら（菩薩たち）は、①無辺の誓願、②燃え上がる［実践］、③真実と

---

[82] samastālaṃbanā に対応する蔵訳は **sems can** ma lus pa la dmigs pa'i とある。

[83]『大乗荘厳経論』17.18 において衆生を所縁とする四梵住は「安楽を願求する者、苦に苛まれる者、安楽にある者、汚染された者［という衆生の部類］に対してはたらく」と説かれる。訳は能仁編 2013: 59 による。

[84] mahādeya。施物などに対する分別を離れた三輪清浄のことか。

[85] tatpariśuddhiḥ punar anupalambhayogena。三輪清浄を指していると理解した。ただし anupalambha-（Tib. mi dmigs pa'i）は筆者による訂正であり、写本には upalambha- とある。ここでの pariśuddhi が空・無分別のあり方を説いていると理解できるので、upalambha- は anupalambha- と訂正しうる。

[86] 別訳としては「それ（浄化）は、彼にとって法を所縁とした慈悲となるだろう」ともしうるか。蔵訳はこの別訳を支持する（de ni de'i chos la dmigs par gyur pa'i snying rje skyes par gyur pa yin no）。

[87] karuṇā は蔵訳では snying rje chen po となっている。

一味なる［深遠広大性］[88] を通じて［無分別なる］法界の境地に到達しているのだから、どうして再び［悲の実践を］中断することがあろうか。（第 14 偈）[89]

①無辺の衆生界を抜済する志を持つがゆえの無辺の誓願［菩提心］によって（cf. v. 11）、②そして燃え上がるエネルギー（精進）を備えた進趣［菩提心］によって（cf. v. 12）、③たとえばサルヴァールタシッダ王子が海を干上がらせることに向けて[90]、すべて［の努力をなした］ように、彼ら（菩薩たち）は、まさに深遠広大性に随順した［すべてのことを］実践する / 引き受ける（cf. v. 13）。そのような彼らは、般若波羅蜜に立脚した、無辺の誓願［菩提心］と燃え上がる進趣［菩提心］などによって[91]、無分別界の境地を直証する。無辺の完成を証得し、無辺の能力を保有する、顚倒なき因の力ゆえに[92]、［彼ら菩薩たちは慈悲行を］中断する者たちではない。以上が、不断（無停止）の因という［大乗の］卓越した点である。

---

[88] 梵文の anantottaptatattvaikarasais … praṇidhānādibhiḥ を釈文に従ってこのように訳した。すなわち ananta が praṇidhāna（v. 11）に対応し、uttapta が pravṛtti（v. 12）、tattvaikarasa が gāmbhīryaudārya（v. 13）に対応する。このうち pravṛtti と gāmbhīryaudārya はこの偈では ādi と省略されているので、和訳では補った。

[89] 第 14 偈の蔵訳は「無辺と熱さの誓願などによって、真実において一味なる法界の境地を得てから、どうして再び退くことがあろうか」（mtha' yas pa dang 'bar ba yi ‖ smon lam sogs kyis de nyid du ‖ ro gcig chos dbyings nyid thob nas ‖ slar yang ldog par ji ltar 'gyur ‖）とあり、梵本と異なる。

[90]『マハーヴァストゥ』の「シリ本生話」には、釈尊が前世で、海に落ちた宝石を取り出すために海の水を桶で全て汲みだそうとした過去世物語が語られる。和訳は平岡 2010: 326–329 参照。

[91] -anantottaptapraṇidhiprasthānādinā のうち、ananta が praṇidhāna に対応し、uttapta が prasthāna に対応する。なお蔵訳は mtha' yas ba'i brtson 'grus 'bar ba dang smon pa dang 'jug pa la sogs pas とあり、一部梵本と齟齬する。

[92] これらは誓願菩提心と進趣菩提心とを指すと考えられる。

［5. 結果：第 15 偈］（Skt. 10v2–6, Tib. 15r1–5）

歓喜、不壊、光輝、多彩（彩り豊か）、無分別、大悲の味（rasa）によって貫かれ[93]、法界を自体とするものが、［誓願などの］果である。（第 15 偈）[94]

かの、最勝の歓喜を本質として、光輝、不壊、多彩、無分別、法界を本質とするもの、それが、すべての誓願などの果である。そしてそれは[95]、大悲の慣性力（āvedha）によって、不断（anavarata）かつ無功用に運用する、すべての他者のための当為（なすべきこと）の遂行を本分とし（kṛtyānuṣṭhānātmaka）、無辺なる菩提の味 / 汁（rasa, rtsi）に貫かれた、無尽蔵の黄金の鉱脈のごとくである[96]。そしてかの、すべてを自体とし、一切を利益し、分別なく、法界を自体とする一切知者の境地は、上述の因（誓願などの四項目）を抜きにしてはありえない[97]。

いっぽう、顛倒なき方便によって正しい［仏］国土を確立することであり[98]、他者を利益するという誓願の種子にもとづいて、そして［その誓願に］順じた発趣の潜在慣性力（saṃskāra）[99] にもとづいて、不断の性質をもつ、世界への利益の拠り所が、善逝の境地として、必ず妥当する。なぜなら、結果は原因につき従うものだからである[100]。

---

[93] mahārasakṛpāviddhaṃ に対応する蔵訳は snying rje chen po'i ro yis khyab とあり、Bhavyakīrti による引用文（次注参照）も snying rje chen po'i ros khyab pa とある（*mahākṛpārasāviddhaṃ）。

[94] この偈は Bhavyakīrti（D1793, 62v5）に引用される。

[95] tac ca は蔵訳で de la とある。

[96] または「無尽蔵なること、黄金の鉱脈のごとくである」とも訳しうる。

[97] この一文の蔵訳には問題がある。gnas 'di ni thams cad mkhyen pa thams cad kyi bdag nyid can thams cad la phan par mdzad pa'i rnam par mi rtog pa'i chos kyi dbyings kyi ngo bo nyid ji ji skad du bshad pa'i rgyu gzhan las 'byung bar ni mi rigs kyi …

[98] 原語は aviparītopāyasatkṣetrapratiṣṭhānaṃ であり、「無顛倒なる方便という正しい福田の拠り所」とも訳しうるか。蔵訳は phyin ci ma log pa'i thabs kyi zhing dam ba la gnas pa ni とある。

[99] 別訳として「意志力」ともしうるか。

[100] この一文には誓願、実践、深遠広大性、不断が原因として列挙されているが、このなかで深遠広大さに対応する表現は明瞭ではない。この一文に対応する蔵訳は次のようである。

［まとめ：膨大な大乗仏典の有意義性］（Skt. 10v6, Tib. 15r5–6）
それゆえに、無上の境地に到達する諸原因である誓願などは、大乗だけにある教えなのだから、一体どうして大乗の膨大なテクストが無意味となろうか。（否、ならない。）[101]

［附論：ヨーガ学派の無種子三昧は無想定である］（Skt. 11r1–4, Tib. 15r6–v2）
また、あること（yat、特定の瞑想状態）を〝無想瑜伽（asaṃprajñāto yogaḥ）[102]、無種子三昧（nirbījaḥ samādhiḥ）[103]〟云々という呼び名で［ヨーガ学派の］異教徒たち（tīrthika）は呼び示すが、それは（tat）ほかならぬ無想定（asaṃjñisamāpatti）をそのように呼んでいるのである[104]。なぜならば、それ（無想定）こそは、全ての心の活動である想念の停止だけを本質としているからである[105]。そしてそれは第四禅に属するものであり、そしてまさに第四禅における広果天の一部たる無想天の衆生たち（bṛhatphalaikadeśāsaṃjñisattva）における無想の境地が、それ（無想定）の異熟果である[106]。そして、ほかならぬそれ（無

---

phyin ci ma log pa'i thabs kyi zhing dam ba la gnas pa ni | gzhan gyi dgos pa'i don du smon lam gyi sa bon dang rjes su mthun pa'i 'dus byas pas mi ldog pa'i chos can 'gro ba la phan par byed pa'i gnas bde bar gshegs pa'i go 'phang du 'gyur ba ni rigs pa nyid yin te | 'bras bu ni rgyu dang mthun pa yin pa'i phyir ro ||

[101] この一文は上記 9r1–2 に示された論難（tatas tīrthikadarśanenaivāsyārthasya gatatvād anarthako mahāyānagranthavistaraḥ）への回答となっている。

[102] 梵本の saṃprajñāto yogo（有想瑜伽）をasaṃprajñāto yoga（無想瑜伽）に訂正した。訂正の根拠は校訂本の当該箇所の注記を参照。

[103] *Yogasūtra* 1.51: tasyāpi nirodhe sarvanirodhān nirbījaḥ samādhiḥ.（訳「それ［つまり行］すらも止滅したときには一切が止滅するので、無種子三昧がある」。）

[104] tathākhyānam は所有複合語として理解した。

[105] Cf. AKBh ad 2.42a: asaṃjñināṃ samāpattir asaṃjñā vety asaṃjñisamāpattiḥ. sāpi cittacaittānāṃ nirodhaḥ.

[106] 無想定の果は広果天に生まれることとされる。Cf. AK 2.41bcd, AKBh ad 2.42c（tasyā asaṃjñisattveṣu pañcaskandhako vipākaḥ）. もしāsaṃjñikaṃ の語が pañcaskandhaka を指すならば、この語を āsaṃjñikas と訂正することも可能か。なおこの末尾の一節の蔵訳は 'du shes med pa'i sems can du skye la 'du shes med pa ni de'i 'bras bu yin no とあり、skye la に直接対応する梵語はない。

想定）を、他（ヨーガ学派の異教徒）は、愚鈍にして[107]善知識に親近せずに〝涅槃である〟と妄想して、［その定に］入定してしまうのである[108]。［しかし］そのときに順後次受業が現前となることに従って、［広果天から死没した後に彼らには］再び地獄、餓鬼、畜生における再生が拡がる（vistāryante）[109]。そしてこれ（無想定）について「無種子三昧」というこの名前（iyaṃ saṃjñā）はまさにぴったりである。なぜならば、一切知者の境地に到達するための「種子」が［そこに］欠落しているからである。それゆえ（tad）、これ（無想定）ついての子供の戯れの結果を妄想することは［以上の附論でもって］十分である。

［自損する異教徒に対する大乗の卓越性］（Skt. 11r4–v1, Tib. 15v2–4）
じつに愚鈍なる、ヴェーダーンタ派、シヴァ派、サーンクヤ派、裸形派[110]などの思想によって掻き乱された知を持つ彼ら（異教徒たち）は、勝義を知らず、

---

[107] pare mūḍhā は蔵訳では shin tu rmongs shing となっている。

[108]『倶舎論』には無想定に入った者たちはこの定が出離であると誤解し、聖者はこの定には入らないと説かれる。AKBh ad 2.42b: niḥsaraṇam eṣāṃ manyante（訳「彼らはこれ（無想定）を出離であると［誤って］考える」）, 2.42d: na hy āryā asaṃjñisamāpattiṃ samāpadyante, vinipātasthānam ivaitāṃ paśyantaḥ. niḥsaraṇasaṃjñino hi tāṃ samāpadyante.（訳「じつに聖者たちは、深坑のごとくにそれ（無想定）をみるので、無想定に入定しない。じつに〝出離である〟との［誤った］想念を持つ者たちがそれ（無想定）に入定するのである」）。

[109] 無想定を得た者は来世で広果天に生まれるが、広果天から死没した後には欲界で生まれることになる。Cf. AKBh ad 2.41d: yena ca tatropapattavyaṃ tasyāvaśyaṃ kāmāvacaraṃ karmāparaparyāyavedanīyaṃ bhavati. yathottarakauravāṇāṃ devopapattivedanīyam.（訳「そしてそこ（広果天）に生まれるべき者には、必ず欲界繋の順後次受業がある」）。なお当該箇所の蔵訳は下記のように一部一致しない。lan grangs gzhan la myong bar 'gyur ba'i las mngon du phyogs par gyur pa gang yin pa des ni slar yang dmyal ba dang | yi dags dang | dud 'gro skye bar 'gyur ba gang yin pa 'di la ni |

[110] kṣapaṇaka が digambara を指すことについては、例えば以下を参照。Durvekamiśra, *Dharmottarapradīpa*, p. 191: diśa evāmbaraṃ yeṣām iti vyuptattyā digambarāḥ kṣapaṇakā ucyante（訳「ある者たちの衣が諸の方角のみである、という語義分析を通じて、［彼らは］裸形派たち（digambala）つまり断食者たち（kṣapaṇaka）、といわれる」）。kṣapanaka に対応する蔵訳は gcer bu pa とある。

頑なに心を凝り固めてしまい、一極に偏った見解に固着して[111]、そして調御の機会をいまだ得ていないので、大悲を持つ者たち（菩薩たち）によってすら捨て置かれており、繰り返し輪廻の束縛だけを頑強にしてしまっているので、悲を体現した御方（ブッダ）[112]によって哀愍されるべき者たちにほかならず、不運の真っただ中にいる者たちである[113]。だから、怒りの矛先を向けるにふさわしい相手たちではない。

他方、仏教に眼を向ける者（仏教徒）たちは、智が顛倒しておらず、輪廻と涅槃の両側における理解に聡く、悪説された［異教の］定説に従った［誤］知をもつ者たち（異教徒たち）によって翻弄されることはない。以上、これが、ブラフマンなどの諸見解よりも、大乗の内容が勝れている点である[114]。

［大乗の典籍が膨大である理由：所化の多様性］（Skt. 11v1–2, Tib. 15v5–7）[115]

いっぽう［大乗の典籍が］たくさんあるのは、所化の志がたくさんあるからである。というのは、煩悩に束縛されるすべての人々が、世尊の悲の根拠（bhūmi）になるからである。そして彼ら（所化たち）は心の働きに限りがない。だから、［所化たちは］無数の方便のやり方によって教化される者たちであるので、［彼らに向けた］諸仏の法の教説が無辺かつ多様であることは、見事に理に適って

---

[111] 偏固であることを意味する。ekāntadṛṣṭyabhiniviṣṭāḥ に対応する蔵訳は bdag tu lta ba la mngon par zhen bas（訳「我見に執着することによって」）となっている。

[112] karuṇāśālinā に対応する蔵訳は snying rjes brgyan pa rnams kyis（訳「悲により飾られた者たちによって」）とある。

[113] この箇所についての蔵訳の語順には問題を含む（snying rjes brgyan pa rnams kyis rgud pa la 'jug pa rnams la snying brtse bar bya ba yin gyi）。

[114] 先の箇所（8v6–9r2）における、大乗と異教徒は変わりがないとする声聞側からの批判に対する回答がここに示されている。なお梵文の 2 つの文（ity eṣa brahmādidarśanebhyo mahāyānasyārthaviśeṣaḥ. bahutvaṃ tu vineyāśayabāhulyāt）について、蔵訳は 1 つの文として理解している（de ltar na tshangs pa la sogs pa'i lta ba las theg pa chen po'i don gyi khyad par shin tu mang ba yang gdul bya'i bsam pa mang ba nyid yin pa'i phyir ro ||）。

[115] 以下は、先述の声聞による論難（9r1–2: anarthako mahāyānagranthavistaraḥ、訳「大乗の膨大な典籍は意味がない」）に対する、大乗側の回答と理解できる。また *Tattvasārasaṃgraha*（D3711, 84b1–4）に一部借用される。

いる[116]。

［異教徒批判のまとめ］（Skt. 11v2–4, Tib. 15v7–16r2）[117]
それゆえに、［異教徒ではなく］仏教徒たちのみが、解脱の道に対して敬虔な努力（utsāha）をもつ者たちなのである[118]。そして［彼ら仏教徒たちは］機根の違いの応じて（つまり真言理趣・波羅蜜理趣・声聞理趣の別に応じて）、速疾にまたは遅くにまたは極めて遅くに解脱に与する者たちであり、相互にアーガマ[119]の意味内容を分析するならば（つまり波羅蜜乗者も声聞乗の仏典を読んだりするならば）、素晴らしい。［しかし］他者（異教徒）なる[120]、より貧弱な智慧しか持たず、悪見に［心］相続が焼き尽くされ、平安の道からはるか遠くに転げ落ちた者たちにとって、大乗を観察することが、一体何の役に立つだろうか。ちょうど生盲者たちにとって、純白色などの乳の性質を観察することが［役に立たない］ように[121]。

（続く）

【資料】*Śikṣāsamuccaya* 第 4 ～ 7 偈 :
第 4 偈
ātmabhāvasya bhogānāṃ tryadhvavṛtteḥ śubhasya ca |
utsargaḥ sarvasattvebhyas tadrakṣāśuddhivardhanam ||
（訳）「［菩薩は自分の］身体と財産と三世の善を、一切衆生のために、喜捨し、それを保守し、浄化し、増大させる」。

---

[116] 梵文の te は蔵訳では単数形 de とあり、梵文 buddhānāṃ は蔵訳で単数形 sangs rgyas kyi とある。また梵文 anantā vicitrā ca は蔵訳で mtha' yas shing sna tshogs pa kho nar とあるので、蔵訳の原本には *anantā vicitrā caiva とあった可能性が想定される。

[117] この一節は *Tattvasārasaṃgraha*（D3711, 84b5–7）にほぼそのまま借用される。

[118] 蔵訳はこの文と次の文をひとつの文として訳する。

[119] 梵文の āgamārtham は、蔵訳では lung bstan pa'i don（「授記の意味」）とある。

[120] 梵文の anyeṣāṃ は、蔵訳では gzhan dag dang とある。

[121] つまり仏教徒同士が、理趣の違いを超えてお互いの教えを相互に観察することは素晴らしいのだが、異教徒が大乗を観察しても何の役にも立たないということがここでは述べられている。以上で異教徒への批判が終わる。

第 5 偈

paribhogāya sattvānām ātmabhāvādi dīyate |

arakṣite kuto bhogaḥ ki dattaṃ yan na bhujyate ||

（訳）「衆生たちに享受してもらうために、［菩薩の］身体などが差し出される。［差し出されたその身体が自身で適切に］保守されない場合、［衆生たちはその身体を］どうして享受するだろうか。［うち棄てられて役に立たなくなった身体を衆生は享受しないだろう。そしてそのような］享受されないような喜捨に一体どんな意味があるのか」。

第 6 偈

tasmāt sattvopabhogārtham ātmabhāvādi pālayet |

kalyāṇamitrānutsargāt sūtrāṇāṃ ca sadekṣaṇāt ||

（訳）「それゆえ、衆生に享受してもらうために、［菩薩は自分の］身体など（つまり身体・財産・善）を守護するべきである。善知識（師友）を放棄しないことにもとづいて、そして諸経を常に深慮することにもとづいて」。

第 7 偈

tatrātmabhāve kā rakṣā yad anarthavivarjanam |

kenaital labhyate sarvaṃ niṣphalaspandavarjanāt ||

（訳）「その中で身体に対する守護とは何か。無意味なことを放棄すること（yat）である。その全て（無意味なことの放棄）は何によって獲得されるのか。実りの無い行動を放棄することによってである。」

〈キーワード〉Nayatrayapradīpa、大乗の卓越性、異教

参考文献一覧

（略号）

AK/AKBh = P. Pradhan（ed.）. *Abhidharma-Koshabhāṣya of Vasubandhu*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1967.

Dharmottarapradīpa = D. Malvania（ed.）. *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa: Being a Sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a Commentary on Dharmakīrti's*

Nyāyabindu. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute 1955.

Bodhicaryāvatāra/-pañjikā = P.L. Vaidya（ed.）. *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*. Darbhanga : Mithila Institute, 1960.

Mahāyānasūtrālaṃkāra = S. Lévi（ed.）. *Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra. Exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon le système Yogācāra*. Tome I-Texte. Paris: Librairie Honoré Champion Éditeur, 1907（repr. Kyoto: Rinsen Book, 1983）.

Śikṣāsamuccaya = C. Bendall（ed.）, *Śikṣāsamuccaya, A Compendium of Buddhistic Teaching Compiled*. Bibliotheca Buddhica. St. Petersburg 1897–1902.

（和文）

加納和雄・李学竹

2020　「声聞による大乘の真実観批判－ *Nayatrayapradīpa* 梵文校訂と訳注（1）－」、『駒澤大学仏教学部論集』51、77–102 頁。

2021　「声聞の離欲と菩薩の大悲－ *Nayatrayapradīpa* 梵文校訂と訳注（2）－」、『駒澤大学仏教学部研究』52 号、95–131 頁。

中御門敬教

2014　「文殊菩薩の浄土経典：蔵訳 < 文殊師利仏土厳浄経 > 第三函の和訳研究」、『仏教学部論集』98 号、55–77 頁。

能仁正顕編

2013　『『大乘荘厳経論』第 17 章の和訳と注解―供養、師事、無量とくに悲無量―』、自照社出版。

平岡聡

2010　『ブッダの大いなる物語〈上〉―梵文『マハーヴァストゥ』全訳』、大蔵出版。

山本侍弘

2005　「Ambararāja（文殊師利）の発菩提心偈―中観儀礼の一側面―」、『論集』32、35–50 頁。

（謝辞：梵本の校訂に際しては、苫米地等流、種村隆元、倉西憲一、Harunaga Isaacson、Péter-Dániel Szántó、Bang Junglan 各氏よりご教示を賜った。梵文写本の確認に際しては李学竹氏にご協力頂いた。記して謝意を表したい。李氏と加納で共同で作成した梵文翻刻に基づいて、加納が校訂と訳注を作成し、序文ほかを執筆した。令和 4 年度科学研究費 [17K02222] [18K00074] [21K00079] [22H00002] による研究成果の一部。）